

腎臓がんについて

～今年の4月からダヴィンチ手術が
保険適用になりました～

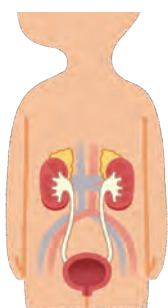
泌尿器科
部長
黒川 覚史



■ 腎臓について

腎臓は、そらまめのような形をした握りこぶしぐらいの大きさの臓器です。腰の左右にあり、通常1つの腎臓で120～170g位の重さがあります。両方の腎臓には、心臓から流れ出た血液の20-25%が注ぎ込んでおり。毎分1Lほども血液が流れています。

腎臓の働きは、大きく分けて2つあります。1つ目は、尿を作って体のバランスを保つことです。水分・電解質(イオン)・老廃物などを適切な量だけ排泄することによって、体のバランスを保っています。2つ目は、体に必要なホルモンを分泌していることです。血圧調節にかかわるレニンの分泌、造血ホルモンであるエリスロポエチンの産生、強い骨を作るためにビタミンDの活性化、などをしています。



■ 慢性腎臓病について

慢性に経過するすべての腎臓病を指します。実は患者さんが1,330万人(20歳以上の成人の8人に1人)いると考えられ、新たな国民病ともいわれています。慢性腎臓病が進行すると、夜間頻尿、むくみ、貧血、倦怠感、息切れなどの症状が現れてきます。また、慢性腎臓病の患者さんは、心筋梗塞や脳卒中などにかかりやすいことも分かっています。

■ 腎臓がん

腎臓にできるがんには、腎細胞がんと腎盂がんがあります。腎臓がんとは一般的には腎細胞がんのことを指します。腎盂がんは、作られた尿が集まる腎盂にできるがんであり、尿管がんや膀胱がんの仲間とされています。

腎臓がん(=腎細胞がん)は、残念ながらどんどん増えていることが報告されています。少し古い報告ですが、1975年と1996年の腎臓がんの罹患率を比較すると、男性で3.5倍・女性で4.0倍に増加しています。また、腎臓がんのリスクを高めるものとしては、喫煙、肥満、高血圧などが明らかになっています。腎臓がんは、早期であれば手術での完治も可能です。

■ 腎臓がんの治療法

腎臓がんの標準的な治療は、外科的な手術療法です。たとえ、肺や骨など腎臓以外の臓器に転移があっても、体調が許せば腎臓がんを摘出した方が生存率の改善が見込めると報告されています(腎癌診療ガイドライン2011年版より)。

腎臓がんの手術療法には、がんのできてしまった腎臓を全部摘出する方法と腎臓を少しでも残してがんの部分だけを切除する方法があります。従来は、『開腹手術』といってお腹を大きく切って腎臓の手術を行ってきました。しかし90年代からは、早期の腎臓がんであれば『腹腔鏡手術』を行うことが一般的になってきました。腹腔